

発達障害児の就労をめざしたライフスキルの獲得 ～放課後等デイサービスにおける調査から～

○康 一煒 (元 早稲田大学大学院 梅永研究室)
梅永 雄二 (早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育心理学専修)

1 目的

近年日本の障害者支援において、発達障害者の就労支援のニーズが高まってきている。しかしながら、成人期の発達障害者は就労の面だけでなく、生活面での困難性が報告されている(梅永, 2014)。その原因として、ライフスキルを十分に獲得できていないことが大きな要因となっている。本研究では、ライフスキルを梅永(2014)による「大人になって日常的に行う行動」と考える。

現在の学校では、読み書き算数といったアカデミックスキルを中心に指導が行われているが、職業的自立に必要なソフトスキル(仕事に必要な仕事そのものの以外のすべてのスキル)やライフスキルにおける指導が十分とは言えない。

放課後等デイサービスでは、ライフスキルの指導や職業教育が取り入れられているところも増えているが、効率的な指導や支援ができるように、どのようなライフスキルが不足していて、またどのような方法でライフスキルを獲得すべきかを検討する上でのアセスメントが必要となる。

発達障害者、知的障害者の職場適応を評価するBWAP2では、その下位項目がライフスキルといわれる内容と重なるところが多い。早期から小学校や放課後等デイサービスなどでBWAP2の4領域63項目を評価し、知的障害児や発達障害児のライフスキル獲得の現状を把握し、個別指導計画を立てることによって、将来の自立につながる可能性が高くなると考える。

本論文では放課後等デイサービスと特例子会社で集計したデータと比較をすることによって、就労に必要な職業準備性を見出し、ライフスキル指導の重要性を検討していく。また、今後放課後等デイサービスで実施するライフスキルにおける指導内容について検討していくことを目的とする。

2 方法

(1) 対象者

本研究の対象者は、X放課後等デイサービスに所属している12歳～18歳の知的障害、発達障害の生徒27名、およびY特例子会社に勤務している成人期知的障害者、発達障害者150名である。

(2) 手続き

X放課後等デイサービスで実施したBWAP2の評価は、実際のセッションやプログラムの際に筆者と放課後等デイサービスの職員が行動観察を行い、検査結果を個人情報が特定されない形式に変換し、Excelデータとして回収した。

Y特例子会社では、研究協力者が実施したBWAP2の検

査結果を個人情報特定されない形式でアセスメントシートに記載し、紙媒体として回収した。

Y特例子会社とX放課後等デイサービスのBWAP2の得点結果の平均値の差を比較するため、t検定を行い、差があるかどうかを検証した。

さらに、堀江(2022)の研究の特例子会社で働く知的障害者・発達障害者の職場適応における課題を見出すために因子分析で分けられた4因子にBWAP2群の粗点を当てはめて、比較も行った。同様にt検定を用いて、Y特例子会社とX放課後等デイサービスのBWAP2の4因子の平均値に有意差があるかどうかを検証した。

3 結果

(1) X放課後等デイサービスとY特例子会社との領域間の比較(t検定)

両群で5%水準において対応のないt検定を行った結果、全領域において両群の間に有意的な差は見られなかった。また、有意的な差はなかったが、IR(対人関係)、CO(認知能力)、WP(仕事の遂行能力)の領域の平均得点は放課後等デイサービス群の方が高かった。一方で、HA(仕事の習慣・態度)においては、特例子会社群の方の平均得点が0.15点高かった。

(2) X放課後等デイサービスとY特例子会社での下位項目間の比較

本節では、X放課後等デイサービスとY特例子会社において、BWAP2の4領域の下位項目の平均得点を比較した。

HA(仕事の習慣・態度)の下位項目のうち、「衛生面」「身だしなみ」「時間順守」「モチベーション」「出勤率」「食事のマナー」及び「トイレのマナー」の7項目の平均得点はY特例子会社群の方が高かった。

IR(対人関係)の下位項目の中では、「他者への援助」及び「破壊的行動」のみがY特例子会社の方の平均得点が高かった。

CO(認知能力)においては、「基本的な要求伝達」及び「移動能力」の平均得点はY特例子会社群がX放課後等デイサービス群より高かった。「移動能力」については、Y特例子会社群の得点は2.82で合格に近かったが、X放課後等デイサービス群の得点は2.48でまだ芽生えの範囲内にあった。

WP(仕事の遂行能力)の下位項目の中で、Y放課後等デイサービス群の方のX放課後等デイサービス群の平均得点より高かった項目は「仕事の量」「仕事への集中力」「タイムレコード」「仕事の安定度」「安全対策」「問題

の報告」「仕事上の体力」「細かい作業能力」「手作業」の9項目だった。そのうち、「仕事の安定度」の差が最も著しかった。

(3) 堀江（2022）のBWAP2の因子によるX放課後等デイサービスとY特例子会社での因子間の比較

本節では堀江（2022）の研究で分類した4因子の平均得点を放課後等デイサービス群と特例子会社群で比較することで、差や傾向を見出すためにt検定を行った。《人とかかわりスキル》領域と《知的スキル》領域が、放課後等デイサービス群の方が有意に高い結果を示した。一方で、《ライフスキル》領域が0.05点、《ハードスキル》領域が0.31点、特例子会社群の方が高かった。

4 考察

(1) 結果の概要

本研究では、放課後等デイサービス群のBWAP2アセスメントの4領域および堀江（2022）による再カテゴリ化した4因子の視点から、また、Y特例子会社のデータと比較して、放課後等デイサービスのライフスキルと就労準備性の傾向とその差をまとめた。

BWAP2の4領域の得点において、放課後等デイサービス群と特例子会社群で比較を行った結果、全領域において両群の間に有意差が見られなかったが、IR、CO、WPの領域の平均得点は放課後等デイサービス群の方が高かった。このことから、これらの領域においてX放課後等デイサービスの児童生徒がY特例子会社に就職するのに必要な能力を有していると言えるだろう。しかし、最もライフスキルの項目が含まれているHAは特例子会社群の方が高かった。中でも、「衛生面」「身だしなみ」「時間順守」「モチベーション」「出勤率」「食事のマナー」及び「トイレのマナー」の6項目の平均得点は特例子会社群の方が高かった。「出勤率」、「モチベーション」が低い原因として、仕事の体験がないことが窺える。学齢期から仕事の体験をさせることでモチベーションを高めることができる。

また、COとWP領域に関して、得点が放課後等デイサービス群の方が高いにもかかわらず、下位項目の中に特例子会社群より低い項目があった。COでは「基本的な要求伝達」と「移動能力」がある。WPでは、「問題報告」や「仕事上の体力」「仕事の安定度」等がある。これらの項目が働くうえで大切なライフスキルであるが、X放課後等デイサービスの児童生徒がY特例子会社で働くのにまだこれらのスキルは十分に身につけられているとは言えない。これから放課後等デイサービスにて指導に取り組むべきであると考えられる。

堀江（2022）の因子分析により再カテゴリ化された4因子の領域で比較を行った。結果から、特例子会社の社員に比べ《人とかかわりスキル》と《知的スキル》は放課後等デイサービスの児童生徒の方が高かったということは、

学校では重要視されているアカデミックスキルではすべて満足できる能力を持っていることと、それらのスキルが比較的到低くても特例子会社で働いている人が多いということが考えられる。また、《ライフスキル》領域《ハードスキル》領域は特例子会社群の方が高く、《人とかかわりスキル》と《知的スキル》の因子よりも、《ライフスキル》と《ハードスキル》の方が特例子会社に就職するのに必要だが、放課後等デイサービスの児童生徒では指導を通じて身につけていきたいスキルであると考えられる。

今後の指導では、アカデミックスキルよりも実体験を通じてライフスキルを身につける指導が重要であり、個々の興味関心や得意分野に合わせた指導が求められ、学齢期でインターンシップや職業体験を行うことが望まれる。

(2) 放課後等デイサービスにて実施すべきライフスキルの指導について

学校教育段階では、ライフスキルの習得と維持の可能性を高めるために、獲得すべき重要なライフスキルを特定し、支援する重要な時期だと指摘されている（Duncanら、2021）。研究の結果に基づいて、今後放課後等デイサービスで実施するライフスキルにおける指導内容について検討した。放課後等デイサービスのBWAP2の結果の各領域内で差があった項目を見極め、成人期に就労の際に発達障害があっても特例子会社などで働く場合、放課後等デイサービスで身につけておくべきライフスキルの項目をピックアップした。

それは、移動能力、金銭管理、衛生面と身だしなみ、時間管理、モチベーション、コミュニケーション能力の6つのスキルであった。

5 今研究の問題と今後の課題

研究においてのデータ数が少なく、偏りがあることがあげられる。より大きいサンプル数や複数の事業所を対象に加えた場合、異なる結果が示される可能性がある。今後は、より多様な放課後等デイサービスや学校にBWAP2を取り入れ、データを回収しさらなる分析を行う必要がある。

【参考文献】

- 1) 梅永雄二（2014）自立をかなえる！ ライフスキルトレーニング実践ブック 明治図書
- 2) 堀江めぐみ（2022）．特例子会社で働く知的障害者・発達障害者の就労上の課題を支援についての研究-BWAP2を用いたアセスメントによる合理的配慮-．早稲田大学大学院教育学研究科修士 論文（未公開）．
- 3) Duncan A, Liddle M, Lori J, Stark.(2021)Iterative Development of a Daily Living Skills Intervention for Adolescents with Autism Without an Intellectual Disability. Clinical Child and Family Psychology Review, vol 24, 744-764.

【連絡先】

康一煒
早稲田大学
e-mail : evakang991226@toki.waseda.jp